

# 浄

monthly  
JŌDO

# 土



1999

7/8

July  
August

# テレコムしよう。

コミュニケーションの未来へ  
**日本テレコム**

お申し込み、お問い合わせは  
お客様センターへどうぞ **0088-82** (無料)

[受付時間] 9:00~23:00 (年中無休)

(インターネットホームページ) <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は**0041**、市外電話は**0088**でテレコムしよう。

# 寛慶寺

長野

寺院紀行

寺に歴史あり

人々に信仰あり

日本の心の故郷を紀行する



草木が美しい寛慶寺境内と本堂。  
は寛慶寺第二十世水科善臣住職。右 左  
は善隆副住職



寛慶寺本尊、阿彌陀如来像



とても珍しい法然上人涅槃像は木像

長野  
寛慶寺

本堂奥の裏庭。中央の松は大地震以前  
の古木



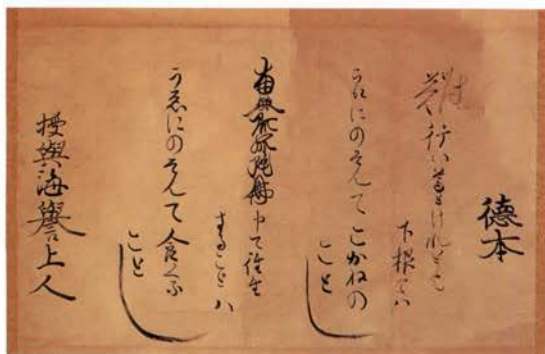
徳本上人の木像



徳本上人はおよそ二週間、寛慶寺に  
逗留し、名号石を建てた



また上人に寛慶寺第十四世海誓上人  
に和歌を二首授与された





寛慶寺歴代上人の墓。  
手前の四角墓は栗田家の墓



曾我兄弟の十郎の妻が持参安置した  
といわれる位牌。裏には建久四（一  
一九三）年と彫られている



善光寺平を流れる犀川。  
信濃川となり日本海に注ぐ

# 浄土

1999/7、8月号 目次

|                     |           |    |
|---------------------|-----------|----|
| カラーグラビア寺院紀行「長野・寛慶寺」 | 写真＝タカオカ邦彦 | 2  |
| 日本史上の法然上人           | 大隅和雄      | 8  |
| 寺院紀行「長野 寛慶寺」        | 真山 剛      | 14 |
| 連載小説 法然上人をめぐる人々（四）  | 石丸晶子      | 22 |
| 表紙の言葉               | 三浦功大      | 30 |
| 東海道五十三次を歩いて（三）      | 原田 功      | 30 |
| 連載 小さな庭の小さな出来事（二）   | 菅野與志美     | 38 |
| コラム                 |           | 43 |
| 暑中見舞                |           | 44 |
| Jフォーラム              |           | 49 |
| 浄土誌上句会              | 選者＝増田河郎主  | 50 |
| まちがいさがし             |           | 53 |
| 編集後記                |           | 54 |



表紙題字＝浄土門主 中村康隆宛下  
表紙撮影＝三浦功大  
アートディレクション＝近藤十四郎  
協力＝迦陵頻伽舎

日本  
史  
上  
の  
法然上人

大隅和雄

現代の日本で、法然上人の名を知らない人はいないはずで、中学校の『歴史』の教科書に、また高等学校の『日本史』の教科書にも、鎌倉時代に新しい仏教が起ったことが書かれ、その仏教革新運動の中で、浄土宗を開いた僧として法然の名が上げられているからです。

しかし、法然、親鸞、日蓮、道元というような鎌倉時代の僧侶の名が、歴史の教科書にきちんと書き込まれるようになったのは、ここ半世紀あまり前からのことで、江戸時代に書かれた多くの歴史書に仏教に関することは見えず、寺子屋などで用いられたさまざまな教科書にも、江戸時代の人々に知恵袋としてよく使われた事典のような本の中にも、鎌倉時代の僧侶の名が、洩れなく書き込まれているというようなことはめったにありませんでした。沢山の参詣者の集まるお寺の説明の中に、開山上人の名が書かれているくらいでした。

法然上人は、浄土宗を開いた祖師ですから、浄土宗の教えを信じている人々は、当然その名を知っていました。天台宗や真言宗のお寺の檀家になっている人々は、伝教大師や弘法大師の名を知っていればそれでよく、日蓮宗、禅宗の信者も、法然上人の名を知る必要は有りませんでした。

江戸時代は、徳川幕府が儒教を教学の中心に据えていた時代でしたから、孔子や孟子、朱子や王陽明というような名は、広く知られていました。が、仏教は、武士の表向きの間では軽視されていて、学問・思想として重要なものとは考えられていませんでした。江戸時代の半ばに儒教に対抗する学問・思想として起こってきた国学は、日本の古典とその精神を重んじて、外来の思想を排斥しようとしたから、儒教と仏教は、排撃の対象になり

ました。例えば、現在、聖徳太子は、日本史上最も広く知られている人物ですが、江戸時代の国学者の間では、日本に仏教というものを受入れることにした、悪人の代表と説かれていたのです。

それでは、広く一般の日本人が、法然・親鸞・栄西・道元・日蓮・一遍という鎌倉時代の祖師たちの名を知ようになったのは、いつごろからなのでしょう。どんな経過を辿ってそうなったのかを、振り返ってみたいと思います。

明治時代になって、日本仏教史の書物が書かれるようになりましたが、それを読んだのはお坊さんか、仏教に関心を持つ知識人たちでした。法然上人を、仏教史上浄土宗の祖師としてだけではなく、広く日本史上の重要な宗教家、思想家として取り上げ、広く一般の読者に対して、その功績を論じようとした最初の人は、植村正久というキリスト教の牧師と、木下尚江というキリスト教徒の社会運動家ではないかと思えます。植村は、旗本の家の長男に生まれた人ですが、明治維新で一家は没落してしまい、苦しい生活の中で英語を学ぶ中に、キリスト教に接して信者になり、牧師となって、東京飯田橋の富士見町教会を中心に、キリスト教の伝道に尽くしました。木下は、信州松本の下級武士の家に生まれ、キリスト教徒になって社会改革をめざし、作家としても活動した人でした。

一九一一年（明治四四）二月に、木下は『法然と親鸞』という本を出版しましたが、その翌月に植村が、『黒谷の上人』という文章を『宗教及び文芸』という月刊雑誌に発表しました。法然上人は、鎌倉時代初期の一三二二年に亡くなったのですが、その七百年の遠忌を期して、浄土宗の人たちの間でいろいろな催しがあり、文章も発表されていたのがきっかけになって、木下や植村が法然について文章を書いたものと思えます。

木下や植村というキリスト教徒が、法然上人に注目して文章を書くには、前史がありました。明治のキリスト教徒として名高い内村鑑三は、欧米の人たちが日本について何も知らず、日本人を理解していないことを残念に思い、一八九四年（明治二七）にアメリカで『代表的日本人』（ジャパン アンド ザ ジャパニーズというのが原題です）という本を出版しました。英語で書かれたその本は、西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮の五人の生涯と実績を紹介したのですが、そこで内村は日本を代表する宗教家として日蓮を上げ、信仰を貫いた生き方を述べています。また、一八九六（明治二九）には、ルーテル派の宣教師上田勤の『史的批評親鸞真伝』が刊行されましたが、それは史実に基づいて書かれた最初の近代的な親鸞伝でした。

旧武士階級出身者が多かった明治のキリスト教徒は、儒教を抛り所にして、ものごとを世俗的、合理的に考えることになっていました。死後の世界や、目に見えないものについては余り関心を持っていませんでしたから、仏教のお寺の檀家になっただけでも、諸宗の教えについて、深く考えたことはなかったのです。

旧武士出身の人たちは、宗教的な問題につき詰めて考えることのない、いわば宗教的に真空状態にあったので、キリスト教に接して始めて、宗教的な世界について考えるようになり、その教えに傾倒して洗礼を受けることになるわけですが、キリスト教はやはり欧米人の宗教ですから、周囲の日本人にはなかなか受け入れられず、宣教師や牧師たちは、日本人に対する布教伝道が可能かどうかを、重大な問題として考えるようになりました。

内村や上田などの明治のクリスチャンは、そうした中で、日本人の宗教性について考えようとして歴史を遡り、日蓮や親鸞に出会うことになりました。内村や上田は、江戸時代

以来の諸宗の教えに従うだけの善男善女とは違う、明治時代のキリスト教徒の目で、日蓮や親鸞の生涯と事績を見た時、その信心の深さと、宗教者としての生き方に、目をみはるような思いをしました。キリスト教を経由することによって、日本の高僧や祖師を、世界に誇るべき宗教家、信仰者として発見したのです。

法然・親鸞・日蓮のようなすぐれた宗教的人格を生み出した素晴らしい宗教性を持つ日本人が、もっともすぐれた宗教であるキリスト教を受け入れるならば、世界のどこにもない素晴らしいキリスト教が、日本に生まれるにちがいない。キリスト教徒である彼らは、明治時代に始まる日本キリスト教の将来に、大きな期待を寄せたわけです。こういう議論を、宗教史の研究者は接ぎ木論といっています。よい性質を持つ台木に、優れた枝木を接ぎ木すれば、比類のない美しい花が咲くようになるという議論です。

そういう前史を見れば、木下や植村が、内村や上田の考え方の流れを継いで、法然上人に注目したことがわかんと思います。植村の「黒谷の上人」は、法然上人についての研究論文ではありません。四十八巻伝とも呼ばれている『法然上人行状絵図』などから得た、浄土宗の人たちの間では一般的な知識をもとにしたもので、九十年後の今、とり立てて話題にする程の内容はないといってもよいのですが、法然上人を、伝統的な帰依の対象としての祖師様ではなく、普遍的な宗教者、信仰者として発見したという点で、大きな意味を持つものだったと思います。

内村や上田は、プロテスタントの立場から日蓮や親鸞を理解しようとしたので、プロテスタントの立場を切り開いたカルヴァンやルーテルと、親鸞・日蓮を重ね合わせてとらえ、法然に始まる新宗派開創き動きを、ヨーロッパ十六世紀の宗教改革に対比して理解しよう

としました。カルヴァンやルーテルが、旧教勢力と闘って新教を打ち立てたように、法然・親鸞・日蓮・栄西・道元といった祖師たちは、停滞し腐敗した南都北嶺の仏教を批判した改革者たちなのだというわけです。上田勤は、ヨーロッパの宗教改革について調べ、『宗教改革史』という厚い本を書いています。

明治維新の後、神道の国教化政策が進められ、排仏毀釈の運動も起こる中で、仏教諸宗の指導者たちは、日本仏教の将来を案じて、ヨーロッパの宗教事情の視察に出かけたり、宗門の近代化に心を砕いたりしていました。宗門ごとに大学を作ったり、教典の編纂に取り組んだりしたわけですが、そういう中で、近代の知識人として活動をしていたキリスト教の宣教師、牧師が発見し、描き出した祖師像が有力な指針になりました。法然・親鸞・日蓮などを改革者として理解し、「祖師に帰ろう」を合言葉にして、封建的な宗門の改革を進め、新しい宗門を築いて行こうとする流れが生まれたわけです。

以上のような見方が形作られて行く間に、近代的な歴史学が成立する中で、法然上人を先駆とする新宗派成立の動きを、鎌倉時代における宗教改革と見る歴史学の議論が成立しました。京都帝国大学の西洋史の先生だった原勝郎というすぐれた歴史学者が、一九〇七年（明治四〇）に「東西の宗教改革」という論文を発表し、法然上人に始まる鎌倉時代前半の仏教界の動きを、旧仏教に対する新仏教の改革運動としてとらえることを提唱しました。その後、鎌倉新仏教の成立という歴史の動きが、日本史上最も重要な宗教改革と考えられるようになり、諸宗派と祖師たちの名が歴史の教科書に書かれ、祖師の生涯と業績が、教室で説明されることになったのです。そして、さらに法然・親鸞・日蓮・道元などの名は、日本文化史を語る時に、欠くことのできないものになっているわけです。

# 寺院紀行

長野

寛慶寺

山門から望む寛慶寺本堂



撮影／夕力才力邦彦  
文／真山剛

冬季オリンピックの開催は長野市を一変させた。

空港もなく電車の便も良くなかった長野市は、全国の県庁所在地の中でも「時間のかかる場所」だったが、オリンピックに伴う長野新幹線開通によって東京駅からわずか七十分となった。

日本のほぼ中央に位置し、水運にも恵まれず四方を険しい山々に囲まれた長野市にあって、オリンピック開催は少なからず大きな意味のある催しであったに違いない。

しかし、この長野市にはこうした足の便の良し悪しとは関係なく、昔から人々の姿が絶えることのない所がある。

本多善光翁が遠く難波からおつれしたご本尊を祀り、かの源頼朝が参拝し、武田信玄が上杉謙信が額ずき、そして織田信長、豊臣秀吉、徳川家康も信仰したお寺である。

こう書けば気付いた方も多いに違いない。そう、善光寺である。

今回の寺院紀行はその善光寺の別当職となり、永きにわたり善光寺を守った栗田<sup>くまだ</sup>氏の菩提寺、寛慶寺を訪れた。

一生に一度は善光寺参りを、と言うぐらいだから読者の中にも善光寺を訪れた方は少なくないに違いない。

しかしその善光寺と道路一本隔てた所にあり、四季折々の草木に彩られる伽藍の寛慶寺を訪れたことのある方は少ないだろう。



長野の顔、善光寺。参道はいつも参拝者であふれている

本堂前に花開く凌霄花をはじめバランス良く並ぶ四季折々の草木、その凹凸が気に入ったと徳本上人が直接石に名号を書いて彫ったといわれる名号石碑が建つ静かな佇まいの寛慶寺。

そして本堂内左右には戸隠山奥の院の仁王像が並び、弥陀三尊両大師の脇には年に一度ご開扉する徳本上人の木像が、そして珍しい法然上人の涅槃像が祀られている寛慶寺。

なかなか魅力的な名刹である。

とはいえ、かく言う私もこの取材で始めて寛慶寺を訪れたのだが、お参りの人の群からはずれ、ふうっと一息入れるや目の前に現れたこのお寺に、そして境内に一步入った途端、なにやら心優しい気持ちになったこの寺におおいに親近感を持つてしまったのである。

さて、この寛慶寺、善光寺の守り役ともいえる別当職の栗田氏の菩提寺であることは先にも述べたが、まさに寺名そのものが室町、戦国時代に活躍し、八十八歳という長寿を全うした栗田寛慶からとられたものである。ここで少し栗田氏の歴史を見てみよう。

栗田氏は北信濃で権勢をふるっていた村上氏の一族で、その名を世に知らしめたのは治承四（一一八〇）年鎌倉殿の命で戸隠の権別当に任じられたところから始まるようだ。

当時の戸隠は全国に知られる修験道の道場で富士山や大山などとならぶ修験の聖地であった。もともと修験道とは最澄の天台宗と空



山栗田が別当をしていた戸隠奥の院から寛慶寺本堂に移された仁王像

海の真言宗が深山へ分け入って難行苦行を重ね、秘法呪法を通じ仏の世界に通じ、悟りを開き靈力を身につけるものである。

平安末期に法然上人を始め、多くの祖師が諸宗派を開くまでは、この天台、真言の教えが仏教の中心となっていた。戸隠山もその修験道場だったのである。その霊山戸隠の別当職につくことは、短絡的に言えば権力、力を手にすることである。

この役を仰せつかったのは、入道して範覚となった栗田義寿である。義寿は水内郡芋井の郷、現在も栗田の地名の残る所を領していた豪族だった。そして義寿が次の仲国のころに栗田城を構えたようだが、それと前後して栗田寺を建立したという記録が残っている。

この栗田寺が寛慶寺の前身である。

その後、一二二〇年以降に善光寺の別当も兼ねることになる。栗田氏全盛時代の到来である。それまでも区別されていた里栗田、山栗田はこの戸隠、善光寺両別当の役目を兼ねてから明確に別れ、戸隠を守る山栗田、善光寺を守る里栗田となったようである。

にぎやかなJR長野駅善光寺口の反対、東口から伸びるオリンピック道路から少し入った所に水内総社日吉大神社がある。栗田址本丸に勧請されたに違いないことは、今も残る土塁を見れば一目瞭然だが、寛慶寺の元となる栗田寺もこの地から遠くない城の南方に建立され、今もその地は寺畑と呼ばれている。



里栗田の居城であつた栗田城跡に残る水内総社日吉大神社

さて、戸隠について善光寺の別当となった栗田氏は、建保（一二一三年から）以後の全盛期を迎えた善光寺の内部にもその力を持つようになったという。

以前に本誌で御開帳を迎えた善光寺の特集を組んだが、その時に如何に善光寺が日本の庶民の浄土信仰の原点であり、またその本尊、一光三尊如来が生き仏として権力者によって遷座させられたかという記事があったが、栗田氏の善光寺別当職就任は、その戦国時代に向かう、まさにその時であった。

武田信玄の善光寺の甲斐移転を始めとして、本尊、一光三尊如来の遷座とともに栗田氏も別当としてその後を追う。

長野↓甲府↓岐阜↓愛知↓浜松↓甲府↓京都↓長野。

この移転すべてに同行したか否かは不明だが、その後の栗田氏は奥州会津に移され、いつとはなくその名が途絶えてしまったという。まさに善光寺とともに、そして戦乱の世とともにあった栗田氏だが、その善光寺である栗田寺は天下取りの火ぶたが切って落とされる直前の明応六（一四九七）年、寛慶の子、寛安が善光寺の東門に移転し、父の名をとって寿福山無量院寛慶寺と改めている。

そして戦乱の世が終わりがけた天正十年、松代の西念寺から洞誉春虎和尚を招き、寛慶寺の第一世としている。

この和尚の名前に誉の字が入っているから明確だが、この和尚を



寛慶寺本尊。光背は特徴的な形だ



名僧随上人が開山春虎上人に、本善光寺参籠の世話を依頼した書状。

招いてから寛慶寺は浄土宗の寺院となったという。それまでの天台宗から浄土宗に変わった理由は、やはり徳川家康との関係になるに違いないし、天台宗と浄土宗（古くは時宗も）という複数の宗派によって維持されてきた善光寺の中の微妙なバランスとも大いに関わるに違いない。それはともかく、こうして浄土宗としての寛慶寺の歴史が始まるのである。

その後の寛慶寺には家康が定めた十八檀林である寺院から住職がやってきている。そして、この時代となつてからの善光寺との関係はかつての別当時代とは大きく変わってきたようだ。

現在は善光寺を支える門前の坊の名の付く浄土宗寺院、全部で十四坊ありすべて若麻績姓だが、その若麻績の名入りの提灯が本堂内に对で下がっていることと、その十四坊の住職がお盆には一同で寛慶寺にお参りに来ること。そして棚経参りとして寛慶寺が十四坊すべてを回ること。これがかつての別当寺院としての名残かも知れない。

さて、庶民の浄土信仰の聖地、善光寺には浄土教諸宗の祖師たちも足を運んでいる。浄土真宗の祖、親鸞聖人は百日滞在し、西山浄土宗の祖、証空上人は京都から善光寺までの道のりに十一の寺を建立し、善光寺参りの便宜をはかった。また時宗の祖、一遍上人も善光寺を訪れているし、鎌倉室町と大いに栄えた時宗は社会事業に従



浄土宗の宗宝ともいえる『浄土二教』の書。書名は仏教の分類を意味している。

事し、『善光寺縁起』の編纂にも携わっているといわれている。

このように、善光寺は浄土教の聖地でもある。ただ、法然上人が訪れた足跡はないようだ。

こうした浄土信仰の地として善光寺は栄えるのだが、江戸時代後期に念仏行者として圧倒的な信者のいた徳本上人も善光寺を訪れている。文化十三（一八一六）年のことで三月二十日に善光寺を訪れ、四月二十三日から五月六日までは寛慶寺に逗留、布教、教化している。

冒頭に述べた名号石は四月二十八日に建立され、また上人は十四世海誉上人に和歌二首を授与している。巻頭グラビアの掛け軸である。また、翌々年には法然上人誕生の地、岡山誕生寺の住職正道上人が寛慶寺を訪れ、門前にやはり名号石を記している。

このように多くの名僧が寛慶寺を訪れるには訳がある。というのは寛慶寺が善光寺の東門近くに移転した頃は善光寺の本堂は現在の場所でも南向きではなく、もっと南に東を向いて建っていた。そしてその正面に南北に北国街道が通っていたのである。

北国街道は江戸時代、加賀百万石の前田藩が参勤交代でも通る主要な街道だったという。東門に建立された寛慶寺はまさにこの街道の要所となったのである。

さて、そうした浄土信仰の地善光寺を大地震が襲う。弘化四（一



北国街道の善光寺宿の本陣となった藤屋。現在も十六代目の当主が歴史を守っている。

寛慶寺の善光寺別当職に名残でもある本堂に下がついている若麻績中の提灯



八四七）年の三月二十四日である。マグニチュード七・四の大地震は、御開帳に集まった全国からの旅人およそ千人と、寺中、町中のおよそ千四百人の命を奪った。寛慶寺もこの被害にあったが、幸い天台宗の大勧進から寄付された表門だけはこの被害を受けなかった。そして、明治十五年に本堂が建立されたが、九年後の明治二十四年、また大火が襲った。しかし、この表門で火は鎮まり、本堂は焼失を免れた。これは表門に彫られている左甚五郎の獅子が霧を吹いて鎮火したからだと言われている。そうした言われのある山門だけに、真偽はともかく、一見の価値はある。

今年で住職四十年目となる第二十世水科善臣住職は、こうした興味深い寛慶寺の歴史を淡々と語ってくれた。大正八年に長野の篠ノ井小松原で農家の五男として生まれ、菩提寺は同所曹洞宗天照寺であったが、同所浄土宗光林寺住職の仲介により十一歳で小僧としてお寺に出されたという住職は、その人生を振り返り、お寺に入れたことに、念仏に会えたことに感謝をしているという。

まさにその感謝の気持ちが行き届いているからこそ、人を安心させる何かがこのお寺にはあるのかもしれない。

（ルポライター）



凛々しく優しい寛慶寺第二十世  
水科善臣住職は今年八十歳

徳川家康が整備した五街道の北国街道。左は寛慶寺山門



「書きおろし連載小説」

## 石丸晶子

法然上人を  
めぐる人々  
式子内親王の生涯

第四回 女院と法親王、式子を見舞う

七

「お心、わからぬではありません」そのとき  
守覚が口をひらいた。

「いや、われらにはようわかんといつてよい  
かもしれぬ」

守覚は式子に落としていた目を離すと、独  
りごとのように、

「み仏への信仰に生きて、それだけで幸せか  
といわれれば、この守覚にも淋しく思う日は  
あった、といわねばなりません。しかし、そ  
の寂しさに打ち克つてこそ、出家者というも  
のでありましょうぞ」

僧侶の妻帯を、国が認めるとか認めないと  
かいうのはおかしな話だが、仏教国家であつ  
た当時、国の政事と人々の生活の大枠を規定  
する律令は、僧侶の妻帯を公にはみとめてい  
なかった。

そこで、多くの僧たちが隠し妻をもつこと

になったのである。

そしてこの隠し妻をもつということも、こ  
そこそとではなく、いわば当り前のこととし  
て社会に通用していた。

僧侶の娘が女房として宮中にあがり、やが  
て天皇に見初められて皇子女の母となる、と  
いうことも少なくなかった。

たとえば式子の同時代を一瞥してみても、  
土御門天皇の生母は法勝寺執行能円の娘承明  
問院在子であり、後白河晩年の寵妃で宣陽門  
院親子を生んだ丹後局高階榮子は、法印澄雲  
の娘である。

もちろん、隠し妻をもたぬ僧たちもいた。

だが、この場合、みめ美しい稚児を寵愛して  
いる例もあつたらしい。

たとえば兼実の夷弟で、たびたび天台座主  
になった慈円である。彼は隠し妻をもたなか  
つたらしい。だが史料をとおして寵童がいた  
ことが推定される、といわれている。

若くして仁和寺の主座に着して以来、空海によって制定された真言の戒律を正すことに努めてきた守覚は、隠し妻をもたなかった。また、みめよい稚児を女性のかわりに愛することもなかった。

「淋しく思う日もあった」、ということばをききながら、式子は今、弟の詠草を思い出している。

何事を 待つともなしに ながらへて

惜しからぬ身の 年を経るかな

思ひての あらば心も とまりなむ

厭いとひやすきは うき世なりけり

人生に何かを期待し、それを待つということともなく、いたずらに年を重ねてきたことだ。待つものを持たぬ私にとって、この命など、少しも惜しくはないものを。

何かこの世に心残りすることがあれば、心がそこに執着して、命が惜しくなることもある。だが、そんなものを持たぬわたしには、この世を厭うことが、何とたやすいことであろう。

姉弟のなかで、亮子は和歌を詠まなかったが、守覚と式子は、貴族社会のなかで名の通った歌人であった。

社交ということをしなない式子が、自邸で歌会を催すことはなかったけれども、守覚はよく自坊で歌会を催し、たびたびそこに参加する定家や家隆をとおして、式子は弟の歌や歌の世界を知っていた。

それは何と灰色の空にたれこめられた、人生を生きる情熱に欠けた歌であらう、と式子と思う。

その守覚が、「み仏への信仰だけに生きて、幸せであつたかといわれれば、淋しく思う日もあつた」、というのである。

式子の心は痛んだ。その痛みのなかで、式子は無言のまま、弟の次の言葉を待っていた。

八

「お目にかかることこそいたしませんでしたが、齋院のお心は、お歌をとおして日頃から存じております。たとえ題詠のものにせよ、お歌には、姉上のお心というものが激しくあらわれている」、と守覚はことばを継いだ。定家や家隆は、式子の詠草を、守覚のもとへもたらしていたのである。

当時、題詠で和歌を詠むことが盛況であった。

題詠というのは、何かの題が出され、この題のもとで和歌を詠むことをいう。

たとえば「恋」にかんして、「遊女に寄する恋」とか、「煙に寄する恋」あるいは「枕に寄する恋」「逢ひて逢はざる恋」等々の題目があたえられる。

すると歌人たちは、このあたえられた題目のもとで、想像力を駆使し、技をこらして、歌を詠むのである。

したがって、それは歌人たちの想像力の産物ではあっても、彼らの実生活の、あるいは心中の、反映や表現ではない。

平安京の貴族社会に生きる歌人たちは、そんな人工的とも、ことばの芸術ともいえる歌を詠みあつて、楽しんだのである。

それは一つの社交の手段でもあった。

だが、と定家たちがもたらす式子の歌を見て、守覚はつねづね思っていた。

たとえ題詠であれ、そこには姉の心の激しい表白があり、心が詠じられていると。

「いいお歌でございます。今は落葉の季節になつておりますが、この屋敷には大きな樹木が多うございますな。表門から檳榔毛<sup>びんろうげ</sup>で屋敷内に入りましたとき、桐の落葉をみつけました」

「まことにこの屋敷は美しい屋敷じゃ。おお、落ち葉をおみつけになりましたか。わたくしは斎院のことばかりに心がいつて、気づきませんでした」 亮子がいった。

「いや」と亮子のことばに守覚は、

「庭はすっかり掃き清められて、ただ何葉かの桐の落ち葉に気づいたのです。それに気づいたとき斎院」

守覚はことばを切った。そのまぶたには今、式子が最近詠じたものだという、歌の一首が浮かんでいる。

桐の葉も 踏みわけ難く なりにけり

必ず人を 待つとなけれど

誰も訪ねてくる人のないままに、桐の落ち葉もつもるにまかせ、踏みわけがたいまになってしまった。この降りつもった落ち葉を踏みわけながら、あの方がいらしてくださる、

と知っているわけでは、必ずしもないのだけれど。

その「あの方」とは――。

ここで待たれている「あの方」の具体的な姿が守覚の脳裏に近づいてきたとき、彼はそれでそれを追い払った。

## 九

守覚はつつけて、「桐の葉も 踏みわけ難く」というあのお歌を思い出しました。庭を掃き清めてしまわれず、お歌のとおり、落ち葉降りつもるなかを檳榔毛でまいりとうございましたぞ」

心にしみ入る、実にいいお歌でございます、といいながら、守覚はゆっくりと一度、一首を低く吟誦した。

待つものが何もないままに人生を生きてきた守覚。

歌のなかでたえず「人」を恋い、「人」を待

ちつづけた式子。その心は、死期の近づいた今もなお、捨てきれずに燃えくすぶっているのだ。そのくすぶり燃えている心は、もしも「その人」が訪ねたならば、死を前にして一挙に焰と化すであろう。

み仏に帰依したくてもしきれぬといい、心が闇にとざされている、という式子の訴えは、恋してなお待ち人が訪れぬ、その心の欠落感がいわせているのだ。

父母を同じくする姉弟ながら、守覚は今、式子の心の世界とのへだたりを思わずにはいられない。

「私は歌を詠まないけれど、そういえばいつぞやの歌会で、大輔が齋院のそのお歌のことを、みなに披露していたのを、思い出しました。口々に賞めていましたよ。必ず人を、というところなど、なかなかいいじゃありませんか」守覚の吟誦をきいた亮子がいった。

彼らの母高倉三位成子の血すじなのか、穏

良な人柄で、貴族社会の伝統や習慣を素直にうけつぎ、そのなかで生きている亮子は、その高い身分に相応する社交に生きる女性でもあった。

自身は歌が得意ではなかったけれども、その邸宅でたびたび

歌会がひらかれたのも、そのためである。

今、亮子がいった大輔という女性は、そんな亮子に仕える女房のひとりだった。歌人として知られ、歌を得意にしないあるじを補い、女院主催の歌の会をにぎやかなものにした。た。

「まことに、齋院のお心がよく表れております」

亮子のことばに守覚が応じた。

「人を待つ、その心を捨てようとしてなお、捨てきれぬ悲しみが」

だが、そこまでいうと、守覚はにわかに顔を改めて式子に、

「しかし齋院、それは煩惱ではございませんか。さきほどのおことばのように、もし今、お病篤いのであれば、かかる煩惱は捨てさるねばなりません。心が闇にとざされているとか、み仏に帰依したくても帰依しきれぬとか、それは甘えでございませう。加持も祈禱も拒まれるゆえに、いつまでたっても煩惱から逃がれられないのです。真言の道に立ち帰らねばなりません。甘えたことは、もう仰せられますな」

六代御室として戒律を正した真言僧の顔に、守覚はもどつていた。そこにはもう、病床の姉をなつかしみいたわる、弟の姿はなかった。

(つづく)

石丸晶子（いしまるあきこ）

東京生まれ、東京大学大学院人文科学研究所修了。現在東京経済大学教授。一九九一年、『式子内親王伝―面影びとは法然』で第一回紫式部文学賞を受賞。著書は他に、『法然の手紙』（人文書院）『お手紙から見る法然さま』（浄土宗出版室）『現代語訳蜻蛉日記』（朝日新聞社）など多数。

今月の表紙

大洒錦

蓮

LOTUS

7.8 月

池の中に蓮華あり

大如車輪

青色には青光あり

黄色には黄光

赤色赤光

そして白色には白光ありて

微妙香潔なり

舍利弗よ

極楽国土には

かくの如くの

功德莊嚴が成就される

蓮華

この不可思議

たとえ七寶池八功德水なくとも

小さな泥田に

咲く

美しく咲いて

いる

#### 花蓮は4日の命

7月は花蓮の月です。夏の朝、かぐわしい香りをただよわせながら、凛として咲き誇る大輪の花蓮を見に出かけましょう。花蓮は4日間の命です。開花初日は午前7～8時頃に2、3分開いてすぐ閉じて蕾の状態に戻ります。2日目は早朝より咲きはじめ7～8時頃満開になり、このときが香りも強く、花弁の色も鮮やかで花蓮の一番美しいときです。12時頃には完全に閉じてまた蕾の状態になります。3日目も早朝より咲きはじめ7時頃には満開になりますが、紅蓮系統は退色が激しいです。花蓮は3日間開閉を繰り返し4日目の午後には散ってしまいます。花蓮の観賞は早朝にかぎりま

表紙写真と文

三浦功大

1942年 宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の話」を毎年発行・責任編集(現在3号までに至る)していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」(西田書店)、「蓮の文庫史」(カド創房)などがある。

# 東海道 五十三次を 歩いて (四)

原田 功

老いてなお  
童の気持ちを持った仲間  
四人で東海道を  
歩きだした

## 6、箱根越え

箱根は「天下の険」と言われて、東海道の最大の難所であると共に日本の国を2分する境目でもあるように扱われてきた。箱根より東を「関東」と言うし、明治生まれの東京の人は箱根より西を「遠い所」と感じていたそうである。このようなことから、箱根を越えるということには、普通の旅よりも別の大きな飛躍が感じられる。私たちは特別の期待をもって、湯本から三島まで、一日で箱根を越える事にした。

### ○東坂

4月20日、前回の終点奥湯本から歩きだす。天気予報は晴れ時々曇りだったがかんかん照りよりは快適だった。山肌は萌え出たばかりの新芽と山桜や色々な木の花が咲いていて、粉をまぶしたような黄緑の波をうち、やさしくほんわりとした調子である。春のうららの

箱根山である。

その山ひだの奥に二段の清冽な白い多岐が落ちていく。「初花の滝」である。道端に碑があった。碑がなければ見落としていたかもしれない。碑に教えられて、

「どこだろう。」

と、みんなで目を左右に移動して、

「あ、あれだ。」

と、4人が同時に同じ言葉を発していた。

須雲川の急峻な谷を隔てた新緑の山肌に糸を垂らしたように初花の滝は落ちていた。私たちが見落としそうになったのは、道が国道になっているために車に気をつけなければならなかったからである。昔の人はのんびりと景色を堪能しながら歩いたのであろう。

歩きながら初花・勝五郎の仇討ち話が話題になる。

H「仇討ちは、昔は美談になったけど、今だつたら犯罪になりますね。」

S「江戸時代は仇討ちは届け出れば公認され

たそうだよ。」

K「民衆も仇討ちを心情的に応援したようですね。」

T「非道な人は制裁を受けて然るべきだが、個人的制裁としての殺人も是認されたわけだ。」

H「今は法による秩序の整った社会だからそんなことは認められませんか。」

K「告訴して裁判にかけて法の裁きを下さすことになる。」

S「社会正義の心情や道徳観もその時の社会体制によって異なるから、今の尺度で昔の出来事を評価することは誤りになることもありますね。」

T「初花・勝五郎に『あなたの行為は犯罪です。』といっても当時の社会には受入れられないでしょうね。」

時にはこんな高尚な話もしながら歩く。

秀吉が小田原を攻めた時、牛の角に松明を

縛り付けて大軍が押し寄せてきたように見せ掛けたという話もこの道なのだろう。山の道であるが、幾多の歴史を積み重ねてきた道である。

鎖雲寺を過ぎると国道は右にそれるが、旧東海道は山の中を直登する。この登りが「女転ばしの坂」である。女性には困難な山登りだったのであろう。最近まで草や木が生い茂り歩くのは不可能だったようであるが、今は自然探勝路として整備され、旧東海道箱根路が復活した。道が沢を横断し溪流を渡る所で中年の女性たちがおしゃべりをしながら弁当を広げていた。

「こんにちわー。」

「おいしそうですねー。」

と、声をかけると、

「さいこー。おいしいですよー。」

「お元気ですねー。がんばってー。」

はちきれるような、明るい声が返ってくる。現代の女性は元気である。「女転ばしの坂」な

ど、苦もなく登ってきたに違いない。

「日本橋から歩いてきたんですよ。」

「え、嘘でしょう。」

と、彼女たちは本気にしない。箱根旧街道を歩いている人は女性が多い。しかし三島まで全部歩き通すという人は少ないようだ。この人たちも東海道を歩き通すなんて途方もないことだと思ふらしい。思えば我々のような閑人ではなればできないことである。彼女たちの方が穏当な感覚である。

割石坂、大沢坂など名前の付いている坂はみんな急坂である。坂を登り切るとぼつかりと国道に出て、そこが畑宿。昔からの立場である。坂がきついでだけに休みたくなる所である。畑宿からまたさいかち坂などを登り、二子山を巻くようにして甘酒茶屋に辿り付く。ここも休みたくなる所である。さらに白水坂、天ヶ石坂を登るとやっと下り坂になる。権現坂である。ここに

「箱根八里は馬でも越すが 越すに越されぬ

大井川」

の碑がある。

やがて芦ノ湖が見えるとはっとして疲れもとれる。芦ノ湖へ向つて一気に下ると元箱根。喘ぎながら登ってきた割りには下りが少ない。芦ノ湖の湖面の標高は723メートルだから、まさに山上の湖なのである。

ここまでが箱根の東坂で、東坂は東海道の中で最もきつい山登りである。天下の険とはよく言ったものである。悪い雲助が横行したのもこの坂で、今でも雲助が隠れるような所はいくらでもある。

## ○西坂

箱根関所を過ぎ、箱根宿の西のはずれ芦川町から箱根峠に向う旧道に入る。曲がりくねる国道を針で縫い通すようにして向坂を登り箱根峠に立つ。箱根峠は外輪山の乗越しになるわけだが、割合に広い。昔の絵を見ても、すすきが生え石が転がった平地に描かれてい

箱根 旧東海道 女転し坂



箱根 権現坂

る。

昔の人は、これまで歩いてきた道を振り返り、険しい箱根の山々や芦ノ湖を眺めながら、いよいよ関東ともお別れだと思ったことであろう。そして西に遥かに霞む駿河湾に目をやり、これから行く駿河の国やその先の道中の事を思いやったことであろう。

いよいよ西坂をくだる。西坂は東坂よりも傾斜はゆるく、距離が長い。東坂が鬱蒼とした暗い森林の中を歩くのに対して、西坂は見晴らしがよく明るい山道である。山野間が灌木や笹に覆われていて、五分刈りの頭のように山の線がくっきりとしていて、空も広い。やわらかな春の日差しを浴びて、のんびりとくだる。

ここでも旧東海道は直線的に山を下るが、国道1号線は蛇行して旧道を何度も寸断する。何度目かの寸断された箇所「接待茶屋」があった。木造の建物は傾いて、人は住んでいない。坂の畑宿のような間の宿のないこの

西坂では旅人たちの貴重な休み所だった。

この「接待茶屋」は、近江の綿糸問屋中村有隣という人が幕府に金を寄付し幕府ではその利息で接待茶屋を設け、通行の旅人に一椀の粥、牛馬には一桶の煮麦を施したものという。

この山の中で営業の茶屋など開く人はなく、かといって長い長いこの坂道では人々は大変な難儀をし、行き倒れになる人も相当にあった。このような茶屋の存在は、封建社会の苦しい生活つらい道中で、人の心の温かさをしみじみと感じさせてくれたに違いない。

今は国道1号線に振り落とされたように家屋も寂れ、人の気配もなく閉鎖されている。このまま無くなってしまうのだろうか。人の心の優しさを伝えるものとして、ぜひ残してほしいものである。

接待茶屋を過ぎて国道を横断して再び旧道に入ってから間もなく右手に「兜石」という大きな岩があった。なるほど兜のような形を

している。秀吉が兜をこの岩に置いたとかいう伝説が書いてあるが、こんな話が伝わるほど多くの人がこの岩を珍しく眺め、単調な旅の慰めにし、一つの道標にもしたのであろう。我々も小休止して岩を眺める。岩を見ているところが本当の東海道なんだよと教えてくれているような気がする。この岩を実に多くの人が眺めたことだろう。岩は動かないがこの前を何百万何千万という人が行ったり来たりしたので。

山中城跡はぜひ見て置きたかった。秀吉が小田原を攻めたとき、ここは北条方の出城だったが半日で落とされてしまったという。関東にとっては箱根は防衛の要所であり、敵が箱根を越えたとなれば決戦が目の前に迫る事を意味する。

諏訪神社から城跡に入ると物凄い大きな榎の木があった。こんな大木はこれまで見たこともない。樹齢600年という。秀吉が攻めてきた時はすでにこの木はあったのだ。その

時でも相当の大木だったにちがいない。こんな木を見ていると、威厳を感じて手を合わせなくなる。まことに見事なものである。

城跡は神社の西側に広がっており史蹟公園になっている。城を取り巻く空堀や土塁が三島市教育委員会によって復元され、遺構の全体がどのようなものだったかがよくわかる。一面に芝生も植えられ、眺めもよく、弁当を持ってピクニックに来るのも良いだろうと思われる。

東坂はあくまでも直線的である。そして長い。箱根山の裾野をだらだらと三島まで下る。人や馬の足で歩く道だから、回り道をするより坂があっても最短距離を選んだほうが効率的なのだろう。国道は車のための道であるから、車の下れる勾配の限度を確保しなければならぬため、くねくねと蛇行して坂を下ることになる。従って旧道は国道に何度も寸断され、旧道を歩く人は国道を何度も横断することになる。由緒ある東海道をこんなにズタ

ズタにせずとも、別のコースに国道を造れなかったものだろうかと思う。

集落もあり、広い所に出たからもう平地だろうと思うと、また下に森や畑が見えて、まだまだ高地なのだと分かる。緩やかな坂を下っていると、急にストンと落ちるような旧坂になったりする。下長坂という所のはずれもそんな坂だった。雨降りには馬も人も尻餅をつき、手も足も泥まみれになり、生きながら地獄の道を行くかと思われるような所で念仏を唱えながら下ったという。今は舗装されて歩きやすいが、昔の人の難儀が忍ばれる所である。

坂を下り切ってやれやれと思うと、まだ下の方に集落と道と低い山が延々と続いている。

この広大な裾野は東海道に沿って新田開発も盛んに行なわれたようだ。山中新田・笹原新田・三ツ谷新田・市山新田・塚原新田と新田と名付けられた集落が連続する。初音が原を過ぎればやっと坂も無くなり、三島の宿は

近い。

天下の險箱根を登り、そして三島に下るという最大の難行であったが、昔の人には及ばないまでも25キロの山道を歩き通した事は、大きな自信になった。そしてこの道を自分の足で歩いて幾多の歴史の跡を見、過ぎ去った時の中に生きた人々の想いを実感できた事も素晴らしい体験だった。これまでで最も東海道の旅らしい旅だった。さらに「箱根を越えた」という事に宗教的とも言えるような成就感を感じたのは不思議な気がする。箱根に対する日本人の特別な想いを私も持っていたのだろうか。

(つづく)

(元公立小学校校長)

小さな庭  
の

出来事

野鳥観察家

菅野與志美

連載第二回

## メジロの巣作りと巣立ち

野鳥の中でも特に夫婦仲の良い鳥はメジロだと思えます。一度番いになるとほとんどの夫婦は別れることはありません。冬でも夏の暑さの中でも、夫婦はびったりくっついて離れません。巣作りも、抱卵も、育雛もすべて雌雄共同で行うといった仲の良さで、誠にほえましい限りです。甘いものが大好きで、我が家の（佗助）（樁）の花が咲き出すと、蜜を吸いにすぐにやって来ます。おかげで花びらは少々汚れてしましますが、愛しい小鳥のためとあきらめています。またムラサキシキブやコムラサキ、千両の実も食べますが、中でもムベ（アケビ）、三葉アケビの実は、丸く穴をあけて中の甘い果肉が大の好物のようです。春になると決まって白木蓮の木に巣産卵します。他の木には我が庭ではなぜか巣作りはしません。そして雄が巣作りに適した枝を

選び、雌が気に入ると、雄に巣の材料運びを促します。そして雌は、くもの糸を枝から枝に引いて、巣のもとになるハンモック状の糸引をして巣の外側の吊り巣を作り、更に昆虫などの繭糸でお椀型にするために中心に入って腰を振って丸みをつけます。この動作が見ていてなんとも滑稽で楽しいものです。そして一番外側をこけなどを使って接合させます。最近この外側の材料として、ビニールのひもを使う鳥が増えていきます。これはメジロばかりでなくヒヨドリなどもそうですが、このビニールによって、雛鳥が巣立つ前、その外側を足でしっかり踏み込むために、そのビニールに足が絡まり、そのまま抜けずに死んでしまう例が多くています。悲しい限りです。そして最後に、巣の内側にすすきの穂などを使って形を整え完成です。これは巣の中で卵の回転をよくするためのようです。

産卵は一日一個ずつ産み、四〜五個ぐらいです。そして抱卵十二日間で雛の誕生です。

それからやはり十二日間雛は、親鳥から虫や果実などの給餌を受け巣立ってゆきます。

二年前のこと困ったことがありました。それは一羽の雛が親と一緒に行動がとりたいのか、チヨロチヨロ歩き回り親鳥からの給餌を受けるのですが親鳥の方へ行かず、私の方へ来てしまうのです。ちょこちょこ小さな体で



歩いて来るその姿は、何ともかわいくてしょうがありません。その日も次の日も一向に親鳥の方へ行かないのには、私も参ってしまい隠れることにしました。三日目は朝から玄関の前のもみじの木に止まり、一日中キヨロキヨロとこちらを見ているのです。親鳥はしきりに呼び続けているのですが、一向にそちら

に行こうとしないのです。その日も薄暗くな  
ってから私が心配で木の方を覗くと、やっと  
親元にいつてくれたようでした。そして一週  
間後、親鳥と共に立派に巣立った雛全員で私  
に姿を見せてくれました。本当にほっとした  
ひとときでした。

## キジバト（ヤマバト）の プロポーズから子育て物語

キジバトは、一九四五年位までは都市部で  
はめったに見ることができず、地方でも警戒  
心が強い鳥として知られます。というのもち  
のころまでは空気銃などでねらわれる事が多  
く、まさに受難の時代でした。最近はそのし  
た事は少なく、人家近くでも普通に見られる  
ようになったものの、人間への警戒心は以前  
強く、近づくとすぐに逃げてしまうのです。

我が庭で栄巢繁殖を始めたのは、一九八六  
年ころからです。十一月末になると九羽ほど  
のキジバトが毎年やって来ては、雄が雌に対

してプロポーズを始めるのです。雄は低い姿  
勢で「グープ、グープ」と鳴いて首を左右上  
下に振りながら雌に近づいてゆきます。雌に  
近づくと「ブン、ブン」と弦をつま弾くよう  
な声を出します。このとき雌が飛び立ってし  
まわなければカップル誕生になります。しか  
し、なかなか簡単にはゆかず、雄は何度も何  
度も繰り返しています。私の庭では番いにな  
るのは毎年せいぜい二組位で、まれに三組と  
いった具合です。

三月になると番いになったカップルは、栄  
巢の準備にかかります。なにぶん狭い庭です  
から最初の番いが栄巢しますと、次の番いは  
順番待ちで、一か月以上待たされます。

私は決して野鳥たちを慣らししているつもり  
はないのですが、窓を開けっぱなしにしてい  
たとき、キジバトが室内のクーラーの上に巣  
をこしらえたことがあります。また仕事場  
の軒下につるした籠の中などに巣が作られる  
こともあり、キジバトはどこにでも巣を作る

ことがわかります。

キジバトは二個の卵を産み、抱卵に入り十三日で雛が生まれます。キジバトはミルクで雛を育てます。親鳥が低い声で「ググ、ググ」と鳴きながら雛にミルクを与えている姿は誠にほほえましいものです。またこのために親鳥は羽化する三、四日の間の自分が食べる餌にも大変気を使っているようです。親鳥は雛に餌を与えないでいい夕方から夜にかけて自分自身の食事を取り、朝までに完全に消化できるようにしているのです。そして五日目ごろから雛に、小さな餌とミルクを混合してあげているようです。これが離乳食になります。そして十日目ごろから餌をそのままとれるようになり、十六、七日目で巣立ちするのです。この間親鳥は、雨の日も風の日も雄も雌も共に子育てに励み、巣立った後もしばらく（一週間ぐらい）は給餌を続けています。そしてこの間に自然界の厳しさの一端を教えているのです。

こうして巣立っていった後親鳥たちは、また次の繁殖にとりかかるのです。こうして一年に四、六回の産卵繁殖を行っています。また途中事故などで順調に繁殖まで行かなかったときなどは、なんと九回も産卵をした鳥を見たこともあります。

上空を鷹などが飛んでいると、「グウー、グウー」と警戒音を発し、近くにいますすべての鳥は身動きひとつしないでじっとして、こちらにも野鳥の緊張感が伝わってきます。

しかし野鳥も歳をとりますと、その姿は少々惨めなものがあります。餌をとるのも大変で、いつもビクビクして小さくなり、私の姿を見ると私を盾にして餌を食べる始末です。そして仕事場の入り口に來ては、戸を開けてくれとねだり、中に入って安心して餌を食べることを覚えてしまいました。老いることのつらさは、人間社会も鳥の社会も変わりがないようです。

（おわり）

〈新刊紹介〉松島定宣上人講述

## 『浄土宗の廻向』

浄土宗長崎教区教化団

宣流会 発行

昨年四月御遷化された松島定宣上人は、布教師を初め現代浄土宗の教師にとりまして、誠に大きな存在であり、浄土宗の正道の教えを伝える先生でありました。

檀信徒へのご説法を始め、各地での講習会での講話、また布教師養成講座での授業等と数多くの講演をされていた先生にちかかわらず、その著書、講演録が発行されていないことは誠に悲しい限りです。

この度、長崎教区磐願寺で開設された「五重相伝」の、先生の勸誡を平成七年に発行された宣流会の方々が中心となつて、おまとめになり、平成八年に開かれた長崎教区普通講習会での先生の講義録を、一冊の本として発行されました。

晩年先生が布教の中で危惧されていた、「往生」の問題、「阿弥陀仏」の問題、「浄土へ還る」という表現等に対する問題に、明確な先生の示唆が述べられ、法然上人讃仰となえられた先生の姿勢が大変良くわかる、すばらしい講演録であると思います。

購入希望の方は、左記までがきにてお申し込み下さい。本代一冊千円、送料実費の振込用紙を同封いたしますので、後日ご送金下さるようお願い致します。

へお申し込み先

〒859-4807  
長崎県北松浦郡田平町里免1372-1

宣流会事務局

かやぶき屋根の四季

昭和日常博物館

触覚連画

漂泊の念仏者——蕉村

◆特集〈やさしさのメディア・ラジオ〉

『皇女和宮をめぐる』中野孝次

◆対談 水谷八重子／寺内大吉  
インタビュー

左とん平

中野雄

清野聡子

アダム・カバット

岸葉子

◆『平家物語新聞』塩森恵子—絵

面白歌舞伎グラフィティ

『八百屋お七とお土砂』古井戸秀夫

# the 法 自然 人間

ザ・ほうねん

領価1000円

発行=(財)浄土宗報恩明照会

東京都港区芝公園4-7-4 〒105-0011

TEL03-3436-3351

発売=(株)西田書店

東京都千代田区神田神保町2-34山本ビル 〒101-0051

TEL03-3261-4509 FAX03-3262-4643

好評発売中！  
お近くの書店に御注文下さい

創刊の余韻、さらに深め **新装!!**

まちがいさがしの答①まんなかの松の木②鳥の右の枝③サザエのカラ  
④さかなのヒレ⑤すいかのビーチボール⑥カニのはさみ⑦女の子の浮輪

# 舞見お中署 申し上げます

総本山知恩院門跡第八十六世  
浄土門主

中村康隆

大本山 増上寺  
法主

藤堂恭俊

大本山 金戒光明寺  
法主

坪井俊映

大本山 百萬遍知恩寺  
法主

大野忍敬

大本山 清浄華院  
法主

江藤澄賢

大本山 善導寺  
法主

民谷隆誠

大本山 光明寺  
法主

戸松啓真

大本山 善光寺大本願  
法主

鷹司誓玉

平成十一年〈夏〉

浄土宗宗務総長

成田有恒

〒154-0807 世田谷区世田谷四―七―九  
大吉祥寺

浄土宗教学局長

袖山榮眞

〒380-0845 長野市西後町一五六八  
十念寺

浄土宗大願寺住職  
浄土宗宗議会議員

神谷英敏

〒102-0822 函館市銭亀町一〇一

九品院住職  
宗議会議員

小田義海

〒857-1165 佐世保市大和町一八八一―  
旭〇九五六 (三三三) 七六七六

靈巖寺

河本眞龍

伊勢教区

山下法文

松阪市樹敬寺

〒112-0802 東京都文京区小石川三丁目  
十四番六号

無量山  
傳通院

電話〇三(三三二)四三三七〇一(代表)  
振替東京六〇九三番

宗源寺

斎藤价洲

# 舞見お中夏 すまげし申

浄土宗東京教区教区長  
光取寺住職

大室了皓

〒141-0821 品川区上大崎一丁目一五番十  
電話〇三(三三四四)八三八四

浄土宗神奈川教区教区長

清水嚴矩

〒248-0133 鎌倉市材木座六十七番十九  
大本山 光明寺中

大正大学  
理事長

大田秀三

〒370-0855 高崎市通町九〇  
電話〇二七(三三三三)四〇〇〇

学校法人  
淑徳大学  
理事長  
大乗淑徳学園  
淑徳短期大学

長谷川良昭

〒147-8645 東京都板橋区前野町五丁目一十二

常光寺住職  
淑徳学園中学・高等学校  
校長

大谷壽雄

〒141-0821 品川区上大崎一丁目一十三番  
電話〇三(三三四四)四九三十一

京都文教短期大学  
学長

伊藤唯真

〒614-0041 京都府宇治市横島町千足八〇番地  
電話〇七七四(二二)四一〇一

総本山知恩院  
おてつき 運動推進部長

東海林良雲

塩釜市雲上寺

平成大事業勸募懇請中  
御影堂屋根替大修理完成  
ひきつづき阿弥陀堂新築再建

美作  
誕生寺

〒720-0802 岡山県久米郡久米南町里方八〇八  
TEL 〇八六七(二二八)二二〇一  
FAX 〇八六七(二二八)二二六二

平成十一年〈夏〉

弘経寺住職

金田進徳

〒902-0023 茨城県取手市白山  
一九九二・一八

孤峯山 蓮馨寺  
吞龍上人奉祀

久米原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七一  
電話〇四九二(三三)〇〇四三  
FAX〇四九二(三六)〇六七六

青森教区  
青岩寺

青山浄晃

函館 称名寺

〒040-0055 函館市船見町十八―十四  
電話〇二三八(三三)〇五七四

定義如来

西方寺

〒989-3213 仙台市青葉区大倉字上下一  
電話〇二二(三九三)一〇一一

愚鈍院  
住職

中村真道

〒984-0051 仙台市若林区新寺三十二二十七  
電話〇二二(二五六)六〇五七

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254-0046 平塚市立野町六一五  
電話〇四六二(三二)二六三八

勝願寺

〒040-0055 埼玉県鴻巣市本町八十二・二下

# 舞見お中夏 すまげし申

清水湊 貝付毘沙門天

忠高山 實相寺

大松寺

住職 酒井亮貫

〒108-0073 東京都港区三田四-1-238  
電話〇三(三四五一)二四九四

梅窓院 住職

中島真成

東京都港区南青山  
2-26-38  
電話 03(3404)8447  
ホームページアドレス  
<http://baisouin.or.jp>

貞松院住職

山田和雄

〒392-0004 諏訪市諏訪二-16-13  
電話〇二六六一五二一九七〇

願行寺住職

佐藤成順

〒 品川区南品田二-1-12

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四-12-18

横浜 大光院

宮林昭彦

天光院

真野龍海



FORUM  
浄土の広場

「浄土の広場」では  
読者の自由な参加をお待ちしています。  
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、  
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。  
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。  
どしどし編集部にお寄せ下さい。

# 浄土誌上句会

## ●若葉

〔特選〕

若葉風寺領三万坪句ふ

細田初枝

●広い寺領の大方は、木々に占められているのだろう。山門をくぐると樹間を抜けてくる風が、たしかに若葉の匂いを含んでいる。中の中から句またがりて続く下の句までの、読みの効果は見事である。

〔佳作〕妻をのせ若葉まばゆし車椅子

上野 明達

若葉風子をあやしめる乳母車

井村 善也

若葉風帽をあみだに郵便夫

島谷ときを

## ●柏餅

〔特選〕

柏餅いつこく者の叔父来る日

道山幸次郎

●片意地の何のというより、ここでは一徹な人と取るのが良いのだろう。食べものの好みもはつきりしているに違いない。俳句の出發

## 増田河郎子・選

点の俳諧は、本来滑稽を意味した。面白味のある句も大いに結構である。

〔佳作〕門前の老舗の味や柏餅

大橋 清

柏餅何時も明るき婆の声

加藤 政男

ぐずる子の両手に持たす柏餅

吉村 尚子

## ●自由題

## 〔特選〕土産売る婆の居眠り春深し

小久保あきを

●観光地だろう。店番の老婆がこつくりこつくりやっている。「蛙の目借り時」という季語があるが、ちょうどそれを思わせる。不景気で暇なのたと取っては、かえってぶちこわしである。素直に楽しむことだ。

〔佳作〕かげろへる砂丘馳せゆくスニーカー

鳥雲に抜けられますの古看板

細田 初枝  
神崎 仁平

山寺の鐘の登どき著莪の花

野村多加子

若葉

寺苑ゆく御堂の辺り若葉雨  
百選の溪流早し谷若葉  
若葉映え加茂の社を牛車ゆく  
一山を若葉で抱き千切れ雲  
山寺の庫裡の増榮若葉風  
峰若葉絵伝でつなぐ寺の道  
若葉見し後も命の鼓動あり  
柏餅  
柏餅籠ごと売られ飛驒の里  
孫達の親の背を抜き柏餅  
空爆や箱に轟く柏餅  
遊ぶ子の少なき漁村柏餅  
子の手跡残りしままに柏餅

大場 清  
平山邦子  
中島一子  
織茂とめ乃  
谷 しげ子  
増田信子  
金子節子  
河合富美枝  
織茂とめ乃  
植田規夫  
松井 勝  
石原 新

自由題

夕翳る牡丹に時鐘届きけり  
母の日にカーネーションの白き供花  
一病を友達として桜餅  
肉となる風を待ちたる鯉幟  
子供の日からからとあられ炒る  
回廊を素足で歩む御忌の僧  
仙人と呼ばれて藤の下にある  
土産屋に猿繫がれて暮る春  
お詫びと訂正  
6月号誌上句会佳作に作者名の誤りがある  
ことが選者の御指摘により判明致しました。  
正しくは、

平山邦子  
中島一子  
織茂とめ乃  
佐藤雅子  
中村善也  
山口信子  
増田信子  
別役玲子

第八回  
浄土誌上句会  
のお知らせ

季節

施餓鬼

葡萄

自由題

締切・八月二十日

発表・『浄土』十月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各一名・佳作各三名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内  
月刊『浄土』誌上句会係

花の宴ヤングルジムは子等の城  
いちだんと音強まりし花の雨  
ペン皿の埃払ふや花曇

井村善也  
瀬川浩子  
中村陽子

空青し風船追ふ子の瞳澄む

中村よみ子

風船の逃げて天井の高さまで

石原 新

紙風船猫がつついて舞ひ上がり

齋藤通敏

うららかな鏡外せぬ埴輪たち

池田伊吹

はつなつの薄い皮膚持つ少女かな

横田舞衣

二の腕に光溢れて夏に入る

芝山由文

でありました。読者各位並びに選者に大変

御迷惑をお掛け致しました。謹んでここに訂

正させて頂き、心よりお詫び申し上げます。

(編集部 佐山)

ぱずる

答えは43ページにあります。

まちがいがし

まちがいは7ヶ所あります。



イラスト・藤井ひろし

BOOK

## 『貸本屋のぼくは マンガに夢中だった』

著者は目黒祐天寺の近くに生まれた。

さまざまな人生の不如意を余儀なくされた父上が戦後はじめた仕事は「貸本屋」。

小学校低学年だった著者のマンガをはじめとする物凄い読書遍歴がこのときから始まる。そのドキドキがいい。膨大な本に囲まれ誰にも邪魔されずにマンガを読み耽る少年の胸のときめき。読んでいて感動が伝わってくる。昭和三十年代前半の東京。

戦争の爪痕がまだくっきりと残っている誰かが貧乏だった頃。時代がはつきりと思いだせる。抑えめの文体がいい。

都電、銭湯、万引き少女、初恋など貸本屋をめぐるエピソードのどれもが懐かしく嬉しい。NHKで銀河ドラマにしたらいいだろうかなどと勝手に思ってしまった。

著者 長谷川裕 草思社刊 1600円

## 編集後記

竹林に幹眺めつつ落ち葉踏む

岱潤

竹林の中を歩いていると、青竹の伸びゆく幹の勢いとすがすがしさを感じながら、一方落ち葉を踏み締めて歩く自分に気づかされる。

どんなことにも陰と陽、裏と表があり、いいことと悪いことは背中合わせだ。車という早くて楽なものが当たり前になったお陰で足腰は弱り、クーラーの部屋から出られなくなったことによつて、夏風邪がいつまでも直らなかつたりする。人間にとつて大事なことは何か、今一度見直さなければならぬと思う。特に管理する側の便利さ

だけを考えたときは、そこにいる人間すら見落とされているようだ。

最近国会が不気味だ。ガイドライン関連法案、通信傍受法案が相次いで成立し、続いて住民基本台帳法改正案と、立て続けに私たちの憲法に保障された、基本的な権利やプライバシーまでもが侵害されるような法案が通過している。多くの戦争は防衛の名のもとに始まり、強圧的政治は管理の名のもとに始まつた歴史的事実の前に、本当の平和は、力による支配や排除からではなく、人間同志の信頼関係を積み上げる中からしか築けないことを、改めて強く訴えてゆきたい。

(長)

編集チーフ  
編集スタッフ

長谷川岱潤  
斎藤晃道  
村田洋一  
佐山哲郎  
間川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土  
頒価六百円

六十五巻七・八合併号  
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可  
印刷——平成十一年七月七日  
発行——平成十一年七月十三日

発行人——真野龍海  
編集人——宮林昭彦  
印刷所——株式会社 シー・ティー・イー

〒一〇五〇〇一一  
東京都港区芝公園四一七十四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会  
電話〇三三三三七八六九四七  
FAX〇三三三三七八七〇三六  
振替〇〇一八〇一八八二一八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷注意



民衆近し、静かに



足元注意



路切あり



前出口



路 縮

安心と安全をお届けするのは、  
このマークです。



さわらな



おれ物注意



安全第一



学童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安 心 と 安 全 を お 届 け す る



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

# 『浄土・特選頒布会』

ご注文・お問い合わせは法然  
上人讃仰会まで。

## 【水晶数珠】

電話：03-3759-7074

FAX：03-3759-6323

## 【布教額・選択集十六章之図】

電話：03-3578-6947

FAX：03-3578-7036

肌身はなさず、  
仏さまの御加護を

## 水晶 数珠



水晶腕念珠

- 水晶腕念珠 ① 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円  
② 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円

- 水晶数珠 プレスレッド ③ 6ミリ珠・M(16センチ)2,200円  
④ 6ミリ珠・L(18センチ)2,500円  
⑤ 8ミリ珠・M(16センチ)2,700円  
⑥ 8ミリ珠・L(18センチ)3,000円

- ・申し込からお届までおよそ3週間です。
- ・送料は一個口あたり300円です。また別途消費税がかかります。
- ・支払いは商品のお届時の代金引き替えです。
- ・商品の品質に関しては万全を期しておりますが、配送時の事故、不良品、誤配送などについては送料当方負担でお取り替えいたします。



水晶数珠プレスレッド



仏壇用宗旨布教額  
家庭の仏壇にぶつかりの布教額です

大(320×183センチ)  
1,260円(送料別)

小(273×142センチ)  
480円(送料別)

## 選択集十六章之図

選択本願念仏集を絵で解きました

豪華額装入り(585×465センチ)  
20,000円(税・送料別)解説書入り  
(お届まで4週間かかります)

